

1. はじめに

土橋遺跡では、現在、B区下面（縄文時代後期前半：約4,000～3,500年前）の調査を行っています（第1図）。下面では、縄文時代の人びとが使った道具（土器・石器など）がたくさん見つかっています（第2図）。



第1図 発掘調査のようす



第2図 土器・石器の出土状況

2. 発掘調査の一般公開

令和元年12月21日（土）～12月27日（金）に、「土橋遺跡発掘調査の一般公開」を開催しました（第3・4図）。開催期間中、164名の方々が見学に来られました。市内の方を中心に、市外からも大勢の方が来られました。ふだん見ることができない発掘調査のようすをご覧になった見学者からは、「土器がたくさん出土していて、びっくりした」、「発掘では、昔の暮らしがわかるだけでなく、いろいろなことがわかるのに驚いた」などの声が寄せられました。また、地元の方々からは、遺跡付近にまつわる過去のお話や、昔の生活習慣などのお話をたくさん聞くことができました。今後の調査に生かしていきたいと思えます。本当にありがとうございました。

ミニ展示コーナーでは、調査で出土した平安時代（約1,000年前）・縄文時代の出土品や写真パネルなどを展示しました。縄文時代の出土品では、「たより12月号」で取り上げた蛇紋岩（じゃもんがん）製の磨製石斧（ませいせきふ）、パイナップルのような三十稲場式（さんじゅういなばしき）土器に興味や驚きの声があがっていました。



第3図 発掘調査現場見学のようす



第4図 ミニ展示コーナー見学のようす

3. 発掘調査の状況

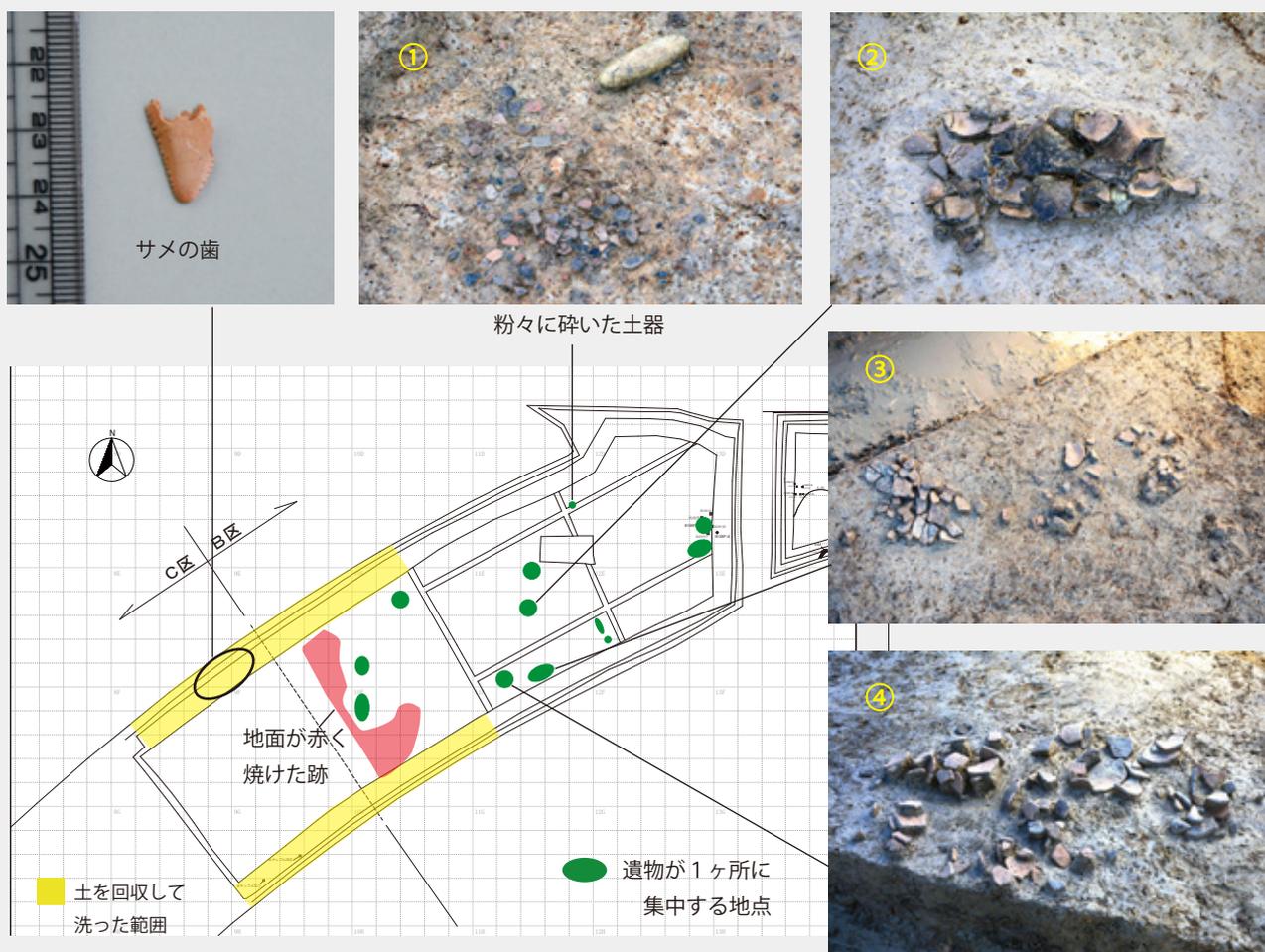
下面では、遺物が複数地点に集中する状況が見られます。土器では「1つの土器がそのままつぶれた状態で出土するもの」と「小さな破片が集中するもの」と2つのタイプがあります（第5図①～④）。小さな破片が集中するものは、わざと粉々に砕いたものと考えられます。これまで調査をした土橋北（どばきた）遺跡や石船戸（いしふなと）遺跡でも同様の傾向が見られます（平成29年度 土橋北遺跡発掘調査だより8月号、令和元年度 土橋北遺跡発掘調査だより参照：阿賀野市ホームページ）。今後は、2つのタイプの差にどのような意味があるのか、検討する必要があります。

下面の黒色土は、土のう袋に回収して、フルイを用いて水洗作業を行っています（第5図の黄色で示した部分）。黒色土からは細かな骨・種実などがたくさん出土しています（たより11月号参照）。北側からは「サメ」の歯も見つかりました。県内では4例目の出土になります。石船戸遺跡では、サケの骨が大半を占めますが、タイ科など海の魚の骨も出土しています。こうしたことから、海辺の人びととの交流があったことが想像されます。

このほか、地面が赤く焼けた跡が見つっています（第5図の赤い部分）。地面が焼けた跡は、南北10m以上の範囲に広がる可能性があります。この中からは、土器や石器に伴って、たくさんの白く焼けた骨が出土しています。土橋遺跡の縄文人たちが、火を焚いてどのようなことをしていたのかを調べ、この場所の性格について考えていきたいと思います。

【参考文献】

古澤安史ほか、2018年『石船戸遺跡』阿賀野市教育委員会



②～④

1つの土器がつぶれて出土したようす

第5図 B区下面全体図